

病害虫発生予察情報(4月予報)

令和6年3月26日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (4月の県平均平年値)	予報の根拠
温州みかん	そうか病	発生量：やや少	3月上旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)
	ミカンハダニ	発生量：多 (寄生葉率5.8%)	3月上旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-)
かんきつ	かいよう病	発生量(中晩柑)：並 (中晩柑発病度(葉)0.71) 発生量(温州みかん)：やや少 (温州みかん発病度(葉)0.24)	3月上旬発生量 (中晩柑)：やや少(-) (温州みかん)：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)
果樹全般	チャバネアオ カメムシ	発生量：やや少	越冬虫数：少(-) 気象予報：気温：高い(+)
茶	カンザワハダニ	発生量：多 (摘採面寄生葉率2.2%)	3月上中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-)
	チャハマキ	発生量：やや多 (幼虫数0.05頭/1.25m ²)	3月上中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：多 (幼虫数0.1頭/1.25m ²)	3月上中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(±)
トマト	灰色かび病	発生量：多	3月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多(+)
	葉かび病・ すすかび病	発生量：多	3月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 コナジラミ類発生量：多	3月中旬発生量 黄化葉巻病：少(-) コナジラミ類：多(+) 気象予報：気温：高い(+)

作物名	病害虫名	予報 (4月の県平均平年値)	予報の根拠
いちご	灰色かび病	発生量：並	3月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
	うどんこ病	発生量：やや少	3月上中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋)
	炭疽病	発生量：多	3月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)
	アザミウマ類	発生量：やや多 ただし、中遠地域：多	3月上中旬発生量：並 (±) ただし、中遠地域でやや多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)
	ハダニ類	発生量：並 ただし、中遠地域：多	3月上中旬発生量：やや少 (－) ただし、中遠地域でやや多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)
	アブラムシ類	発生量：やや多	3月上中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索!



静岡県農薬安全使用指針
・農作物病害虫防除基準

<https://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【温州みかん】

●そうか病

予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均発病度 0.06）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量も平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病は葉や果実の生育が進むにつれ発病しにくくなるが、若い時期に発病しやすく、特に展葉初期の降雨は感染を助長するため、薬剤防除を行う。
- ・ 苗、若木での発生が多い病害であるため、新植や改植をしたほ場では発生に注意する。
- ・ 被害のある夏秋梢は伝染源となるため、除去する。また前年に多発したほ場は伝染源を翌年に持ち越しやすいため発生に注意する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、平均寄生葉率は 12.8%（平年 3.0%）と平年より多かった。地域別の平均寄生葉率は、東部地域で 2.4%（平年 1.3%）、中部地域で 10.0%（平年 5.2%）、西部地域で 25.9%（平年 2.6%）と、各地域で発生が多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 着花前のこの時期は果実への実害は生じない。ただし、葉に多発すると旧葉の落下を助長することもあるため、注意する。
- ・ マシン油乳剤を散布する場合、散布直後の降雨で防除効果が低下することから、晴天が数日続くと見込まれる際に防除を実施する。

【かんきつ】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、中晩柑類の葉での平均発病度は 0.58（平年 0.77）と平年よりやや少なかった。温州みかんの葉での発生は認められなかった（年平均発病度 0.11）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量も平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 罹病葉のついた夏秋梢は、重要な伝染源となるので早急に除去する。
- ・ 中晩柑類では、発芽前、5月上旬及び下旬、6月下旬（梅雨期）に薬剤防除を行う。温州みかんでも、昨年または現時点で本病の発生が見られたほ場では、中晩柑類に準じた防除を行う。ただし、新芽は薬害が出るので発芽後～新梢伸長期は薬剤散布を避けた方がよい。
- ・ 伝染を防ぐため、防風垣、防風網の整備等を行い防風対策に努める。

【果樹全般】

●チャバネアオカメムシ

予報の根拠

- ・今年2月における越冬量調査において、落葉1㎡あたりのチャバネアオカメムシ越冬虫数は、県平均0.5頭（平成1.3頭）と平成より少なかった。
- ・各地域における同種の越冬虫数は、東部1.0頭（平成1.7頭）、中部0.6頭（平成1.0頭）、西部0.2頭（平成1.4頭）と、いずれも平成より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平成より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・地域や園地によって発生状況が異なることから、ウメやビワでは、ほ場における発生をよく観察し、早期の発見及び防除に努める。

【茶】

<生育の概況>

茶業研究センターの報告では、新芽の生育は3月4日時点で平成より1日早かったが、その後の気温が平成より低く推移していることから平成並であると推察される。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、樹冠面（摘採面）での寄生葉率2.3%（平成0.9%）、裾部での寄生葉率4.5%（平成1.1%）と平成より多かった。
- ・防除員からは、平成に比べ発生がやや多い報告が複数あった。
- ・1か月予報では、降水量は平成より多いが、気温は平成より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・樹冠面の葉に寄生が見られる茶園では早期に防除を行う。その際、葉裏に薬液が届くように散布する。
- ・凍霜害等を受けた茶園では、被害を受けなかった新芽にハダニが集まり集中加害することがあるので、防霜対策を万全にする。
- ・新芽がハダニの被害を受けた場合は、薬剤の摘採前日数に注意して直ちに防除を行う。

●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、チャハマキの越冬幼虫数は0.4頭/1.25㎡（平成0.3頭/1.25㎡）と平成並だった。一方、コカクモンハマキの越冬幼虫数は0.7頭/1.25㎡（平成0.2頭/1.25㎡）と平成より多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平成より多いが、気温は平成より高いため、両種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・昨年は両種ともに1世代発生が多かったことから、秋の防除を実施しなかった茶園では越冬幼虫の密度が高い可能性がある。防除適期は越冬世代成虫の発蛾最盛期の後となる。

<その他病害虫>

●褐色円星病（緑斑症）

防除対策

- ・3月上中旬の巡回調査では、平均発病葉率は17.0%（平年19.3%）と平年よりやや少なかった。
- ・本病は、多発すると一番茶萌芽期から生育期に下葉が落葉し、品質・収量への被害が大きくなる。薬剤による防除適期は夏期以降となるが、被害は一番茶生育期に顕著となるため、被害が大きかった茶園では、この時期に発生状況を確認しておき、夏～秋期に防除を実施する。

●マダラカサハラハムシ

防除対策

- ・近年、葉を食害される被害が発生した茶園が増加している。これらの茶園では一番茶芽に越冬成虫による被害が発生するおそれがあるため、一番茶生育期に薬剤防除を行う。なお、各地区の防除規制や摘採前日数に注意する。

【トマト】

<生育の概況>

生育はやや早い～やや遅く、地域によりばらつきがある。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率12.4%（平年9.2%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を助長する（本病の生育適温は18～23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最低限にするなど）。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため、速やかに取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・植物体への結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより施設内の湿度低下に努める。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率11.8%（平年5.5%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・葉かび病については、抵抗性品種（Cf-9）を侵すレース 2.9 の発生が県内で確認されている。本県では 12 月以降、発生が増加する傾向があるため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、発生に注意する。
- ・本病は潜伏期間が 2 週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・3 月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病の平均発病株率は 0.3%（平年 2.4%）と平年より少なかった。
- ・コナジラミ類の平均寄生株率は 16.6%（平年 8.4%）と平年より多かった。
- ・1 か月予報では、気温は高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、適切に処分する。
- ・わき芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・今後、気温が上昇しタバココナジラミの発生に適した条件となる。成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、植物体を完全に枯死させ、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

【いちご】

<生育の概況>

生育は平年並からやや遅い状況。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・3 月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.5%（平年 2.3%）と平年より少なかった。
- ・1 か月予報では、気温は平年より高く、降水量も平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・本病は気温 20℃前後の多湿条件下で発生が著しく助長される。朝夕の冷えこみによる結露など、施設内の多湿環境を避け、循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等の耕種的な対策を行い、湿度を管理する。
- ・曇雨天が続く場合は、施設内が多湿となる薬液散布は避け、くん煙剤を利用した防除を行う。
- ・株が過繁茂となると発生が助長されやすいため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
- ・発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均発病株率 1.0%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・胞子の発芽適温は 20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。
- ・多発生すると防除が困難であるため初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。
- ・株が過繁茂となると発生が助長されやすいため、下葉除去を適切に行う。果実でも頻繁に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、平均発病株率 2.1%（平年 1.1%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・発病株から周囲へと伝染するため、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて圃場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、殺菌処理を行ってから処分する。
- ・気温の上昇に伴い再び発生が増加する。今季は 2 月の高温の影響で病徴の進展が一層見られるため、本ぼでの新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する可能性がある。
- ・本病発生ほ場の栽培株は潜在感染している恐れがあるため、健全に見えても親株に使用しない。
- ・本病発生ほ場では、栽培終了後の土壌や資材の消毒を徹底する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は11.7%（平年11.7%）と平年並であった。地域別の平均寄生株率は、東部地域で6.2%（平年9.9%）、中部地域で15.8%（平年17.3%）、中遠地域で13.2%（平年7.9%）であり、中遠地域での発生がやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・花における発生状況をよく観察し、寄生が認められた場合は少発生うちに防除する。
- ・天敵を利用しているほ場で薬剤散布する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。
- ・花はアザミウマ類の増殖源となるため、必要のない花は摘み取る。また、施設内外の雑草や花き類についても本虫の増殖源となるため、除去する。
- ・4月以降、気温が高くなると本虫の飛び込みが増える。施設開口部には防虫ネット（目合1mm以下）を被覆し、施設外からの本虫の侵入を防ぐ。ただし、被覆により施設内の温度・湿度が高まるため、換気に注意する。
- ・栽培終了後は、施設を密閉するとともに蒸し込み処理を10日以上行い、残存虫を死滅させる。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は8.2%（平年12.9%）と平年よりやや少なかった。地域別の平均寄生株率は、東部地域で1.2%（平年5.4%）、中部地域で7.8%（平年26.3%）、中遠地域で15.6%（平年7.1%）であり、中遠地域での発生がやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は、少発生うちに防除する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、気門封鎖剤や天敵を積極的に活用する。なお、気門封鎖剤は殺卵効果が低く、残効性も期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・天敵を利用している場合は、ハダニ類と天敵の発生状況をよく観察し、必要に応じて天敵の追加放飼または薬剤散布を行う。薬剤散布する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.6%（平年2.2%）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・発生に注意し、初期防除に努める。
- ・アブラバチを利用している場合は、寄生蛹（マミー）の発生状況をよく観察し、防除の成否を確認する。薬剤散布する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。

【稲】

＜その他病害虫＞

●いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯病、イネシンガレセンチュウ

防除対策

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ<https://www.s-boujo.jp/>）」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚まきは発病を助長するため、適正な種量を守る。

育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
- ・他県ではいもち病の QoI 剤耐性菌の発生が問題となっている（本県での発生は確認されていない）。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」（<http://www.taiseikin.jp/guidelines/>）を参照。

●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

防除対策

- ・常発地では媒介虫となるヒメトビウンカの箱施用剤による防除を徹底する。

●トビイロウンカ

防除対策

- ・本虫の日本での発生量は年によって大きく異なり、海外からの飛来時期、量、回数等に影響される。このため、本虫に効果の高い薬剤を含む育苗箱施用剤による予防防除を徹底する。なお、本虫はイミダクロプリド（アドマイヤー等）に対する感受性低下が報告されているため、本剤が含まれている育苗箱施用剤はトビイロウンカ対策に用いないよう注意する。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

防除対策

- ・主要種のアカスジカスミカメは雑草に産み付けられた卵で越冬し、春に孵化する。孵化直後は、水田周辺のイネ科雑草（スズメノテッポウ、セトガヤ、早生型チガヤ）が寄主植物となることから、4月中に除草すると効果的である。ただし、成虫の行動範囲は最大で半径 300m 程度と広く、個々の水田周辺を除草するだけでは十分な防除効果が得られない場合もあるため、地域ぐるみで除草することが重要である。

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

- ・ 県内全域で分布が拡大している。昨年の7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・ 周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を破砕する。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

【小麦】

<その他病害虫>

●赤かび病

防除対策

- ・ 4月に発生が少なくても、5月に多発することがあるので予防散布に努める。特に出穂期から乳熟期にかけて、気温が高く降雨が続くような場合は注意する。
- ・ 防除適期は開花期前後となる。一回目の薬剤散布を穂揃期から5日目までに行い、さらにその5～7日後に二回目の薬剤散布を実施する。

●うどんこ病・赤さび病

- ・ 昨年4月中旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は52.6%（平年12.6%）と平年より多かった。また、赤さび病の平均発病株率は3.6%（平年1.9%）と平年より多かった。
- ・ 本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く「イワイノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。
- ・ うどんこ病の第一次伝染源は前年の被害残渣で越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源はほ場に落下した穀粒で越冬した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意する。
- ・ 止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に薬剤の予防散布を行う。
- ・ 窒素肥料の過多を避ける。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和6年3月21日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 3月23日から4月22日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率70%です。
	降水量	降水量は、多い確率50%です。
	日照時間	日照時間は、少ない確率50%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率60%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率60%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率50%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	20	70
1か月	降水量	20	30	50
1か月	日照時間	50	30	20
1週目	気温	10	30	60
2週目	気温	10	30	60
3～4週目	気温	20	30	50

【予報の対象期間】

- 1か月 : 3月23日(土)～4月22日(月)
 1週目 : 3月23日(土)～3月29日(金)
 2週目 : 3月30日(土)～4月5日(金)
 3～4週目 : 4月6日(土)～4月19日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1
 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
 URL <https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>